

二〇二五年度 札幌大谷大学社会学部地域社会学科

一般選抜Ⅱ期

国語

注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題冊子は9ページあります。
- 3 試験中に印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。

Ⅰ 次の文章は清水晶子「女性リーダーに見る次世代リーダーシップのあり方。」(『フェミニズムってなんですか?』文春新書、二〇二二年)の一部である。本文を読んで、後の問いに答えなさい(設問の都合で原文の一部を省略改変した)。

新型コロナウイルス感染症の世界的拡大の初期、感染者数、死者数ともかなり低く抑える対策をとることに成功した国のリーダーに女性が多いことが話題になりました。西欧ではドイツ(アンゲラ・メルケル)、北欧ではフィンランド(サンナ・マリン)、ノルウェー(エルナ・ソルベルグ)、デンマーク(メッテ・フレデリクセン)、アジアでは台湾(蔡英文)、オセアニアではニュージーランド(ジャシンダ・アーダーン)。これらの女性リーダーたちは、国民の理解と協力を求めて①ジンソクに^a対策をとり、少なくとも初期の段階では感染の拡大を抑えることができていました。そのことから、女性のリーダーシップについてメディアで^aポジティブに取り上げられることも多くなっています。とはいえ、^(注1)フェミニストたちが女性リーダーたちを常に諸手を挙げて歓迎してきたかといえば、そうとも言いきれません。

例えば、マーガレット・サッチャーは女性としてはじめてイギリスの首相に就任し、一九七九年から一九九〇年までイギリスという大国のリーダーとなりました。けれども、規制緩和や金融システム改革などに強いリーダーシップを発揮した彼女は確かに政治家として有能だったものの、新自由主義と保守主義とに基づいて彼女が推し進めた政策は、福祉をはじめとする弱者への社会保障を切り捨て、社会の格差を拡大することにつながっていくものでもありました。そして多くのフェミニストたちが、それは自分たちの望む社会とはかけ離れたものだ、と感じたのです。こういったことも前提にした上で、パンデミック下で女性リーダーたちの姿勢に注目が集まった今、あらためて女性のリーダーシップについて考えてみたいと思います。

女性がトップにある国で、感染症の流行が初期段階では抑制に成功したことは、「女性が主として担ってきた子育てや介護などケアの経験が、感染症対策に生かされた」と短絡的に結びつける意見も生み出しました。この見方は、「女性は本質的にケアに向いている」というフェミニストが従来②イギを唱えてきた発想にもつながりかねず、注意が必要ですが、少なくとも「女性をリーダーに擁する政治・社会体制の国は、COVID-19のパンデミックのような危機に直面したときに柔軟な対処ができる国でもある」とは言えるのかもしれない。

もちろん感染症拡大抑制それ自体にはさまざまな要素がからんでくるので今後の検証を待つ必要がありますが、それでも、女性が男性かを問わず、今回のパンデミックを通して^A従来とは異なる「リーダーシップ像」の可能性も見えたように思います。

これまでリーダーの資質として重視されがちだったのは、力強さや決断力といった伝統的には男性性と結びつけられることの多い要素でした。けれども、伝統的には女性性と結び付けられてきた資質、たとえば弱い人や困っている人へのケアを重視するとか、常に自分が前に出て主張するだけでない

く、人の話を受け止めるとか、そういった点で優れたリーダーがいてもいいのではないかと考える人は増えているように思えます。

とりわけ、リーダーには誰かに頼ったりすることも弱さを見せたりすることもない、独立した強さが求められることがしばしばありました。しかし二一世紀に入って、むしろ自分が弱いところを認め、他の人に補ってもらうことを厭^{いと}わない、協力体制を作ることに優れたリーダーも出てきています。ニュージーランドのジャシンダ・アーダーン首相が、就任後に出産して産休を六週間取得することを国民に率直に話し、その間は副首相が首相代行をつとめることについて国民の了解を求めたときの姿勢などは、その一例と言えるでしょう。

「自分についてこい！」と引つ張っていく強さだけをリーダーシップと考えるのではなく、私たちの社会のどこが^③脆弱で、どういうところをケアしていけばいいのかを一緒に考えて考え、協力しながら社会をまとめていく力もリーダーシップなのだ、というオプシオンが増えたことは、いい傾向です。とても弱ってしまっている地球（環境）をいたわる、という視点も、今の時代のリーダーには不可欠ですよね。

二〇一六年アメリカ大統領選挙で民主党候補となったヒラリー・クリントンは、学歴、職歴、政治経験すべてに抜きん出たエリートで、初の女性大統領への期待も高まっていました。しかし、ジェンダー平等も含む社会的公正や平等の問題に非常に敏感だといわれているレイト・ミレニアル（一九九〇年代生まれくらい）やジェネレーションZ（一九九〇年代後半～二〇一〇年代生まれ）と呼ばれる若い世代の多くは、クリントンではなく、彼女と民主党指名を争ったバーニー・サンダースの支持にまわりました。クリントンは女性候補ではあっても「恵まれた富裕層の利害にしか関心がなく、経済的格差に^{（注2）}コミットしていない」とみなされたのです。

^Bサンダースを支持したこの世代の声を反映しようと、二〇一七年には「自分たちの声を政治に反映させるために民主党から次世代のリーダーを議会に送り込む」という趣旨の「ジャステイス・デモクラッツ」という団体が立ち上げられます。この団体にサポートされた新人候補の一人、アレクサ・オカシオ・コルテス（AOC）はニューヨーク州から立候補し、民主党下院ナンバー4で議員を一〇期務めた現職ジョセフ・クロリーを予備選挙で破り、本選挙で共和党候補を破って史上最年少の二十八歳で下院議員になりました。その戦いぶりは「レボリューション——米国議会に挑んだ女性たち」というドキュメンタリー映画で紹介されています。

AOCはブロンクス出身の父親とプエルトリコ人の母親を持ち、多民族が暮らすブロンクスの労働者階級の家庭で育ちました。ボストン大学在学中に父親を病気で亡くし、卒業後はウェイトレスで生計を立てつつ、サンダースの選挙キャンペーンに加わるなどの活動をしていましたが、弟の推薦を受けて、ジャステイス・デモクラッツのサポートで立候補します。そして見事に下院議員に当選したのです。

AOCは、ポイントを押さえ、簡潔にわかりやすく印象に残る話し方することで知られています。自分が選挙民と同じ地域で生まれ育ち、働き、

選挙民と同じ経験をしていることを強調し、「だからみなさんの代表にふさわしい」と訴えて共感を勝ち取っていくのです。一方、彼女と予備選挙を争ったクローリーは地元出身でも、地元で暮らしているわけでもなく、子どもをブロンクスの学校に入れているわけでもありませんでした。

ただ議員は有権者の「代表」であって、大統領のような国の「リーダー」ではありません。これからAOCが政治家として④カツヤクしていくうちに、自分を支持している人たちと経験がずれてくることもあるでしょうし、「代表」ではなく「リーダー」として行動することがより強く求められることもあるでしょう。そのとき彼女がどんな戦略を取ってくるのか、個人的にはどこかワクワクしながら注視しています。

「レボリューション」を見ていて私が興味を惹かれたのは、AOCがクローリーとのテレビ討論会に向けて演説の練習をしながら、“I need to take up space”と何度もつぶやくシーンです。「存在感を出さなくちゃ」という意味ですが、文字通り訳せば「場所をとらなくては」ということになります。

これは女性のリーダーシップを考える上で重要です。政治の討論会であれ、会社での会議や地域のイベントであれ、自分は当然その場にいる権利があるという態度で「場所をとる」ことは、多くの女性にとってそれほど自然に身についた振る舞いとは言えないのではないのでしょうか。そしてこれは^c女性がどのような振る舞い方を期待されてきたのか、それがどのくらい深く文化に根付いているのか、ということを示しています。

その点でも目をひいたのは、ドイツのアンゲラ・メルケル元首相です。たとえばトランプ元大統領や習近平国家主席と並んでも圧倒するほどの存在感があつた彼女はもはや“I need to take up space”と自分に言い聞かせる必要なく、「場所をとる」ことに成功しているように見えました。

自分自身を振り返っても、女性は「場所をとる」経験を積む機会を与えられないことが多いと思います。いつでも一歩下がって、主張し過ぎることなく控えめに遠慮がちであること、言い換えればできるだけ場所をとらずにいることを女性たちに期待する文化が残っている限り、それに対抗して女性のリーダーシップを可能にしていくためには、物理的にも心理的にも社会的にも女性が「場所をとる」ことを意識的に⑤奨励していく必要があるのかもしれません。

AOCのような次世代の女性「リーダー」たちがいちいち「場所をとらなくては」と自分に言い聞かせなくても、必要なだけの「場所をとる」ことが自然にできるような文化を作っていくこと。^d女性のリーダーシップは、そういうところから考えることもできるのではないかと思います。

(注1) フェミニニスト——フェミニニズム（女性への差別や抑圧に抵抗し、女性の生き方の可能性を広げようという思想）を支持する者

(注2) コミット——深く関わること

問一 傍線部①～⑤の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して記しなさい。

問二 傍線部 a 「ポジティブ」、傍線部 b 「目をひいた」の意味を本文に即して記しなさい。

問三 傍線部 A 「従来とは異なる「リーダーシップ像」とあるが、それに当てはまるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の弱さを隠すことなく、誰かと補い合いながら協力体制を整えようとするリーダー

イ 自分の強さを開示し、人々の先頭に立って行動することのできるリーダー

ウ 強い決断力を持ち、他者に適切な指示を与え、理想を実現することのできるリーダー

エ 弱い自分を認めながらも、自力でそれを克服しようとするリーダー

オ 地球環境に配慮した優れたアイデアをいくつも生み出すことのできる頭のいいリーダー

問四 傍線部 B 「サンダースを支持したこの世代の声」とは具体的にどのようなものか。50字程度で説明しなさい。

問五 傍線部 C 「女性がどのような振る舞い方を期待されてきたのか、それがどのくらい深く文化に根付いているのか」とあるが、その「振る舞い方」を具体的に説明している34字の箇所を本文中から抜き出して記しなさい。

問六 傍線部 D 「女性のリーダーシップ」について、あなたの考えを自由に記しなさい。

Ⅱ 次の文章は平田オリザ「コミュニケーション能力とは何か?」(『わかりあえないことから―コミュニケーション能力とは何か』講談社現代新書、二〇一二年)の一部である。本文を読んで、後の問いに答えなさい(設問の都合で原文の一部を省略改変した)。

二〇二二年六月某日、富良野市立布部ぬのべ小学校。

夕張山系の懷にある布部小は、全校生徒一名、そのうち五名が外国籍の生徒という多文化共生社会の①サイセンタンに行くような学校だ。

外国籍の子どもの内訳は、アメリカ人二名、スイス人二名、シンガポール人とのハーフが一名。肌の色や瞳の色はそれぞれ違うが、みな、日本語を、ほぼ不自由なく話す。

今日はこの一人と、半日かけて演劇を使った国語の授業をするのだ。

「六月でこの暑さは珍しい」と富良野の方たちは言うけれど、東京から来た私には、開け放たれた窓から入ってくる風が心地よい。

現在、こういった形で、芸術家が学校現場に入っていく活動が全国に広がっている。二〇一〇年度からは、「コミュニケーション教育推進事業」という名で約二億円の予算がつき、試行段階だが、全国二九二校の小中高등학교で、実際に俳優や演出家、ダンサーなどが出向いていき、直接、身体や言葉を使ったコミュニケーション教育を進めてきた。その後も、少しずつ規模を拡大して、この事業は継続している。

民主党の教育政策の中核を担う鈴木寛元文科科学副大臣は、この施策を予算二〇〇億円まで伸ばして、希望する全国すべての教育機関で実施できるようにしたいと考えている。この行財政の厳しい折に、そんな予算がつくものかと思われるかもしれないが、お隣の韓国では、すでに二〇〇九年度で六二五億ウォン(Ⅱ約四四億円)の予算をつけて、ほぼ六割の小中学校でこの施策を実施している。

シンガポールも同様の教育を始めていて、この分野においてもアジアの先進国の中で日本だけが明らかな後れをとっているのだ。

日本でも、「コミュニケーション教育」という言葉が叫ばれて久しい。昨今はいささかヒステリックなほどに、どこに行ってもコミュニケーションの必要性が(注)喧伝される。

たとえば、企業の人事担当者が新卒採用にあたってもっとも重視した能力について、二五項目のうちから五項目を選んで回答するという日本経団連の経年調査では、「コミュニケーション能力」が九年連続でトップとなっている。二〇一二年では、過去最高の八二・六パーセント。ここ数年は二位以下に、二〇ポイントもの差をつけている。

ちなみに「語学力」は、ここ数年、六パーセント前後である。

それほどに企業がコミュニケーション能力を望んでいるのだとすれば、就職率を最優先する大学ならば、カリキュラムについて抜本的な改革を行わなければならないだろう。計算上は、週に一時間英語を教えたとすれば、週に一〇時間以上は「コミュニケーション」について教えなければならないことになる。

と、これは極端な物言いだが、それほどに学校教育の内容と、企業の要求がずれてきているのだ。もちろん、大学が企業の要求にすべてあわせて人材を育成しなければならぬと言っているわけではない。大学の役割は、たしかに他にもあるだろう。しかし、社会の要請に応じて、教育のプログラムも変わっていくべきなのだが、それがまったくなされていないことは、やはり大きな問題だ。

少なくとも、たとえば、語学だけができて、望む企業には就職できないという現実がここにある。実際には、語学のできる学生とコミュニケーション能力の高い学生というのは多少の相関性があるから、やはり語学のできる学生は就職に強いわけだが、もしも語学しかできない学生というのがあると仮定すれば、おそらくその学生は、本人は国際的な企業への就職を望んでも、語学学校の先生くらいしか就職口がないことになる。

ではしかし、企業がこうも強く要求している「コミュニケーション能力」とは、いったい何だろう？

就活まつただ中の学生たちに聞いてみても、かえってくる答えはまちまちだ。

「きちんと意見が言えること」

「人の話が聞けること」

「空気を読むこと」

結論から先に言ってしまうえば、いま、企業が求めるコミュニケーション能力は、完全にダブルバインド（二重拘束）の状態にある。

ダブルバインドとは、簡単に言えば二つの矛盾した（注²）コマンド（特に否定的なコマンド）が強制されている状態を言う。たとえば、「我が社は、社員の自主性を重んじる」と常日頃言われ、あるいは、何かの案件について相談に行くと「そんなことも自分で判断できんのか！ いちいち相談に来るな」と言われながら、いったん事故が起こると、「重要な案件は、なんでもきちんと上司に報告しろ。なんで相談しなかったんだ」と怒られる。このような偏ったコミュニケーションが続く状態を、心理学用語でダブルバインドと呼ぶ。

現在、表向き、企業が新入社員に要求するコミュニケーション能力は、「グローバル・コミュニケーション・スキル」Ⅱ「異文化理解能力」である。OECD（経済協力開発機構）もまた、PISA調査などを通じて、この能力を重視している。（略）

「異文化理解能力」とは、おおよそ以下のようなイメージだろう。

異なる文化、異なる価値観を持った人に対しても、きちんと自分の主張を伝えることができる。文化的な背景の違う人の意見も、その背景（コンテ

コスト)を理解し、時間をかけて説得・納得し、妥協点を見いだすことができる。そして、そのような能力を以て、グローバルな経済環境でも、存分に力を発揮できる。

まあ、なんと素晴らしい能力であろうか。これを企業が求めることも当然だろうし、私もまた、大学の教員として、一人でも多く、そのような学生を育てて社会に送り出したいと願う。

しかし、実は、日本企業は人事採用にあたって、自分たちも気がつかないうちに、もう一つ的能力を学生たちに求めている。あるいはそのまったく別の能力は、採用にあたってというよりも、その後の社員教育、もしくは現場での職務の中で、無意識に若者たちに要求されてくる。

日本企業の中で求められているもう一つの能力とは、「上司の^③意図を察して機敏に行動する」「会議の空気を読んで反対意見は言わない」「輪を乱さない」といった日本社会における従来型のコミュニケーション能力だ。

いま就職活動をしている学生たちは、あきらかに、このような^c矛盾した二つの能力を同時に要求されている。しかも、何より始末に悪いのは、これを要求している側が、その矛盾に気がついていない点だ。ダブルバインドの典型例である。パワハラ^cの典型例とさえ言える。

私はいま、本務校の大阪大学で、ロボットを使った演劇作品を創っている。その記念すべき第一作『働く私』は、^(注3)ニートのロボットの話だった。働くために作られたはずのロボットが働けなくなり、そのこと自体に悩むという設定の短編戯曲だ。

戯曲の執筆にあたって、この研究のパートナーである天才ロボット博士石黒浩先生に、実際に、このようなことが起こるかどうかを、あらかじめ確認した。

石黒先生の答えは、「未来においては、十分にありうる」というものだった。

現在でも、内容の異なるコマンドを【X】^{ばや}継ぎ早に出せば、コンピューターはあっけなくフリーズする。未来の、すぐれた人工知能を搭載したロボットなら、おそらく簡単にはフリーズをせずに、「働かない」という状態になることも、十分に予想できると言うのだ。

私の劇団の演出部に、岩井秀人という劇作家がいる。たいへんな才能の持ち主で、二〇一一年度にはテレビドラマのすぐれたシナリオに贈られる向田邦子賞を受賞した。いまでこそ、劇作家として日の出の勢いの岩井君だが、彼は一六歳から二〇歳まで引きこもっていて、家から一歩も外に出られない状態が続いた。

その岩井君が『働く私』を観に来たので、石黒先生から聞いた先の話をしてあげたら、「うちがまさにそうでした」と言う。彼の家では、典型的なダブルバインドのコミュニケーションが^④頻繁に行われていて、「まあ勉強なんてできなくっても、身体だけ丈夫ならいいんだから」と言われながら、

通信簿を持って行くと、「何だ、この成績は！」と突然怒られるような環境で育ったのだそうだ。

現在、この「ダブルバインド」は、統合失調症の原因の一つとも考えられている（これはあくまでも仮説だが）。このような環境に長く置かれると、多くの人が、「操られ感」や「自分が自分でない感覚」「乖離感」などを感じるようになると言う。その結果として引きこもりなどが起きやすくなる。

いま、日本社会は、社会全体が、「異文化理解能力」と、日本型の「同調圧力」のダブルバインドにあっている。一つの小さな家庭の中でも、ダブルバインドが繰り返されれば、それが統合失調症や引きこもりの原因となる。だとすれば、社会全体がダブルバインドの状態にあるいまの日本で、ニートや引きこもりが増えるのは当然ではないか。いや、そのような個別具体の^⑤ゲンショウ面だけではなく、日本社会全体が内向きになっているとされる理由も、おそらくはここにある。

^D日本社会全体が、コミュニケーション能力に関するダブルバインドが原因で、内向きになり、引きこもってしまったている。

（注1）喧伝——盛んに言いはやして世間に広く知らせること

（注2）コマンド——命令。指令。

（注3）ニート——「not in education, employment or training」の略。就学・就労せず、職業訓練も受けない若者のこと。

問一 傍線部①～⑤の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して記しなさい。

問二 【X】に最適な言葉を次の中から選び、記号を記しなさい。

ア 星 イ 時 ウ 矢 エ 所 オ 弓 カ 地

問三 傍線部A「同様の教育」とあるが、その具体的な内容について説明しなさい。

問四 傍線部B「語学だけができて、望む企業には就職できない」とあるが、それはなぜか。次の中から本文の内容に合致するものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 語学力が高い学生はプライドが高く、扱いにくいと思われるから。

イ 語学力が高い学生は日本語を用いたコミュニケーションが苦手な傾向にあるから。

ウ 企業が求める人材として語学力はあって当たり前だと考えられているから。

エ 企業が何よりも重視しているのはコミュニケーション能力だから。

オ 企業が重視しているレベルの語学力を学生が持っているとは限らないから。

問五 傍線部C「矛盾した二つの能力」とあるが、それぞれどのような能力か。本文の内容を踏まえて二点記しなさい。

問六 傍線部D「日本社会全体が、コミュニケーション能力に関するダブルバインドが原因で、内向きになり、引きこもってしまっている」とあるが、これに関するあなた自身の考えを自由に記しなさい。